資料２－１

令和4年5月25日
第4回中野区子ども・子育て会議　話題提供

# 若者支援をめぐる論点
## 自立、貧困、生きづらさ、居場所

駒澤大学　萩原建次郎

# 国の子ども・若者支援施策の転換と概要

国の青少年育成・支援は、この10年で大きな転換期を迎えた。戦後、長らく青少年施策の柱は健全育成と非行対策であったのが、包括的な子ども・若者支援へと転換したからである。

その契機となったのが2009年（平成21年）に制定された「子ども・若者育成支援推進法」である。その概要と特徴は、①すべての子ども・若者の健やかな成長支援②困難を有する子ども・若者やその家族支援③社会全体で子ども・若者の育ちを支援する環境整備にある。☛添付資料

背景として、ひきこもりやニート、若年無業者が社会課題となり、「生きづらさ」「貧困」「自立」「居場所」が施策のキーワードとなり、対象年齢も40歳未満までが「若者」として引き上げられた。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 追加シート

## 施策の基本的方向

### すべての子ども・若者の健やかな成長を支援

(1)自己形成支援
- 日常生活能力の習得 ― 生活習慣の形成、規範意識等の育成 等
- 多様な活動機会の提供 ― 自然体験、芸術・伝統文化体験 等
- 学力の向上 ― 基礎学力の保障等／高校教育の質の保証 等
- 大学教育等の充実 ― 質の高い教育の展開支援 等
- 経済的支援の充実 ― 子ども手当、高校の実質無償化 等

(2)社会形成・社会参加支援
- 社会形成への参画支援 ― 社会形成・社会参加に関する教育（シティズンシップ教育）の推進／子ども・若者の意見表明機会の確保
- 社会参加の促進 ― ボランティア活動、国際交流活動 等

(3)健康と安心の確保
- 健康の確保・増進 ― 思春期特有の課題（喫煙、性感染症等）への対応／健康教育の推進 等
- 相談体制の充実 ― スクールソーシャルワーカー等の活用 等

(4)若者の職業的自立、就労等支援
- 就業能力・意欲の習得 ― キャリア教育、職業教育の体系的な充実／ジョブ・カード制度の推進 等
- 就労等支援の充実 ― 高校生、大学生等に対する就職支援 等

### 困難を有する子ども・若者やその家族を支援

(1)困難な状況ごとの取組

①ニート、ひきこもり、不登校の子ども・若者への支援等
子ども・若者支援地域協議会の設置促進（ネットワークの形成）／支援に携わる人材養成／地域若者サポートステーション事業の実施 等

②障害のある子ども・若者の支援
教育・就労支援等／発達障害のある者の支援

③非行・犯罪に陥った子ども・若者の支援等
非行防止活動、相談活動の推進／薬物乱用防止（再乱用防止等）／少年院における矯正教育等の充実／しょく罪指導等処遇の充実 等

④子どもの貧困問題への対応
子ども手当、高校の実質無償化、奨学金の充実／ひとり親家庭への支援／貧困の連鎖の防止／状況把握 等

⑤困難を有する子ども・若者の居場所づくり
要保護児童の居場所づくり／グループホーム等の居場所づくり

⑥外国人等特に配慮が必要な子ども・若者の支援
外国人の子どもの教育充実／定住外国人の若者の就職促進／性同一性障害者等／十代の親への支援

(2)子ども・若者の被害防止・保護
児童虐待防止対策／里親の拡充など社会的養護の充実／児童買春、児童ポルノ等の犯罪対策／犯罪被害にあった者等への対応／いじめ被害、自殺対策／被害防止教育（メディアリテラシーの習得、情報モラルの涵養等） 等

### 社会全体で支えるための環境整備

(1)環境整備

①家庭、学校及び地域の相互の関係の再構築
- 保護者等への支援を行う「家庭を開く」取組 ― 家庭教育に関する人材養成、相談体制の充実 等
- 外部の力も活用した「開かれた学校」づくり ― 学校支援地域本部やコミュニティ・スクールの設置促進／スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーの活用 等
- 放課後の居場所やさまざまな活動の場づくり ― 放課後子どもプランの推進 等
- 犯罪等の被害に遭いにくいまちづくり

②多様な主体による取組の推進
- 相談体制の充実 ― 子ども・若者総合相談センターの体制確保支援
- 民間団体等の取組の推進 ― 国民運動等の取組の推進

③関係機関の機能強化、地域における多様な担い手の育成
- 専門職の養成・確保
- 地域における多様な担い手の育成 ― 青少年リーダー等の育成 等

④子ども・若者を取り巻く有害環境等への対応
フィルタリングの性能向上・利用普及／インターネット上の違法情報の取締り／ゲームや携帯電話をめぐる問題への取組 等

(2)大人社会の在り方の見直し ― 雇用・労働の在り方の見直し 等

# 有用性重視の能力観の拡大と子ども・若者への能力期待

図表1

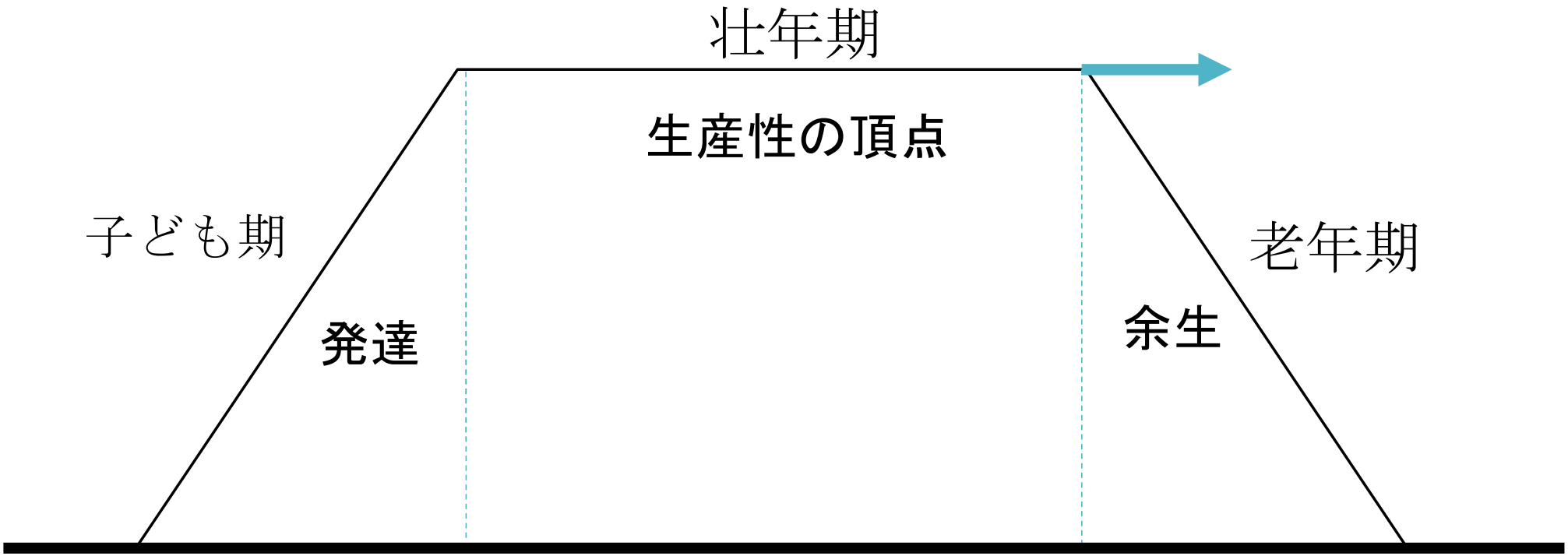
| 名称 | 機関・プログラム | 年 |
|---|---|---|
| 生きる力 | 文部科学省 | 1996 |
| エンプロイヤビリティ | 日本経営者団体連盟（日経連） | 1999 |
| リテラシー | OECD-PISA（生徒の学習到達度調査） | 2000-15（3年おき） |
| 人間力 | 内閣府（経済財政諮問会議） | 2003 |
| キー・コンピテンシー | OECD-DeSeCo（コンピテンシーの定義と選択） | 2003 |
| 就職基礎能力 | 厚生労働省 | 2004 |
| 社会人基礎力 | 経済産業省 | 2006 |
| 就業力 | 文部科学省 | 2008 |
| 21世紀型スキル | ATC21S（インテル、シスコ、マイクロソフト） | 2010 |
| 21世紀型能力 | 文部科学省（国立教育政策研究所） | 2012 |

松下佳代『高校・大学から仕事へのトランジション－変容する能力・アイデンティティと教育』
ナカニシヤ出版,p.92,2014より作成し、萩原が新たに加筆

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 近代産業社会の台形型ライフモデル

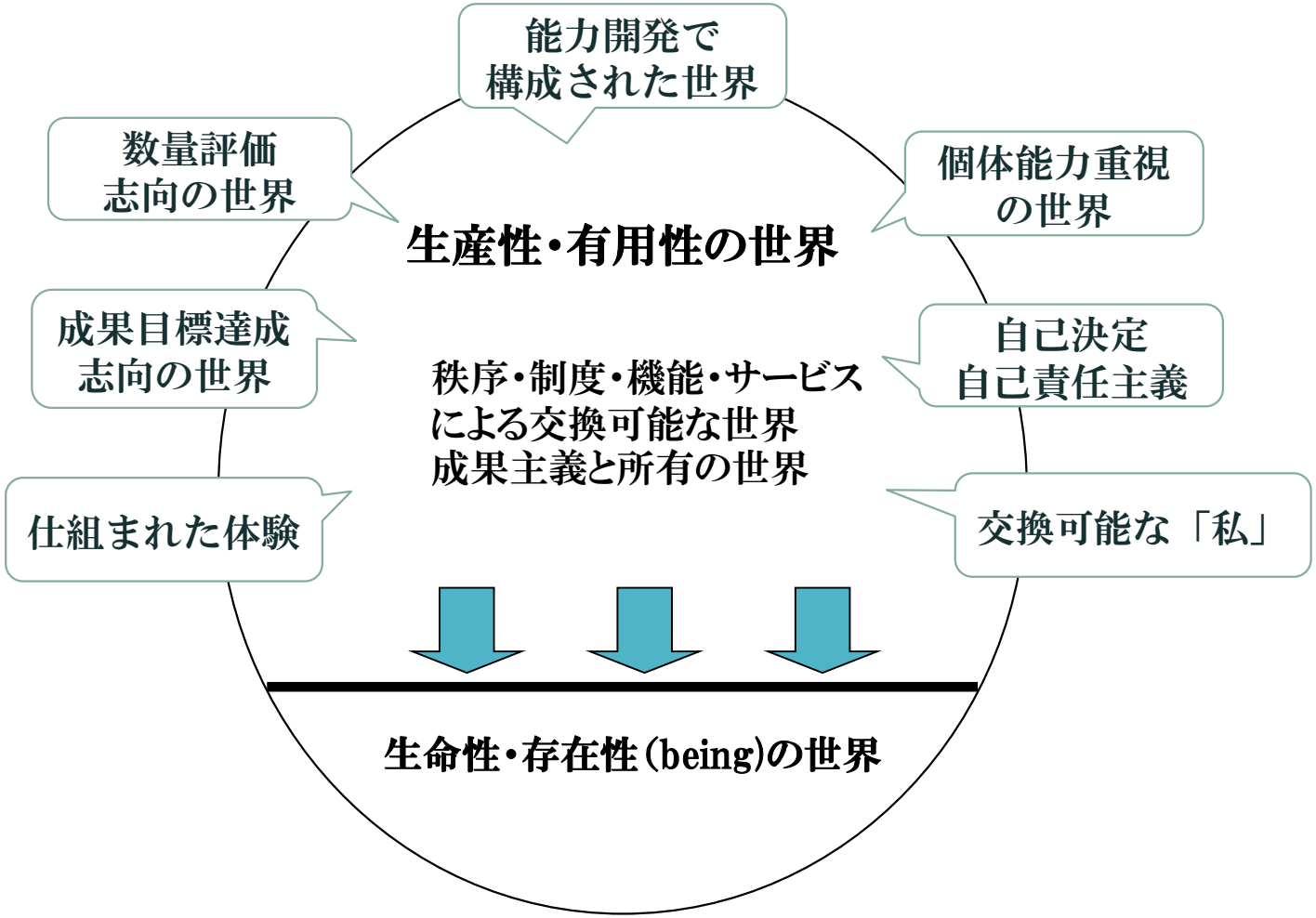
図表2




高橋勝『経験のメタモルフォーゼ』勁草書房, 2007, p. 52-57をもとに作成

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 子ども・若者の成育環境の現代的特徴　図表3




©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 有用性・生産性の世界の特徴

図表3に示したように、この世界の特徴は能力開発で構成された世界であり、個体能力重視の世界ゆえに自己決定・自己責任重視の世界でもある。

あらゆる生の諸側面や諸活動を数量化（見える化）し、成果目標を設定し、予測可能なものへ変換し、結果を重視するところに特徴がある。図表1のように、人間の生のあらゆる営みを「能力の束」とみなし、仕組まれた体験・学習プログラムでその能力開発と成果を求める世界である。

人間を個体の能力発達に還元し、数量化し、意図的計画的に仕組まれたプログラムでその能力を開発する。その結果、出来上がるのは経済産業界にとって有用な人材である。しかし、これは個別具体的な子ども・若者にとってすれば、「自分でなくてもよい」「誰がなってもかまわない」交換可能な自己ということになる。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 現代社会での「自立」の意味を問う①

図表2・3のような近代産業社会が進行した現代における「自立」の在り様について、教育哲学者の高橋勝は次のように指摘する。

モダニティが進行して、社会が激しく流動化しはじめると、人々は共同体における身近な他者から切り離されて、不特定多数の他者と関わらざるをえなくなる。それは、社会変動によって、人々が安定した共同体を失って孤立し、濃密な関わり合いを喪失することを意味している。個人が共同体から「自律※することは」、同時に「孤立すること」とほとんど背中合わせとなる。

※引用者注：「自律」は本稿での「自立」を指す。

高橋勝編著『子ども・若者の自己形成空間』東信堂,2011年,18頁

# 現代社会での「自立」の意味を問う②

このような共同体からの離脱を促進させてきたのは、長いあいだ近代化を裏支えしてきた個人の自由と自立意識を促す原理であると高橋は指摘する。

封建社会や全体主義国家のように不平等や自由の抑圧がなされる体制下では、「自立」の原語であるindependence（独立、自立、抑圧状態からの解放）の原理は有効に働く。

しかし、ここまで見てきたように、生産性と有用性重視の世界が肥大化し、個人の能力発達に過剰な期待がかかる自己責任社会においては、自由と自立の原理は有効に働くどころか、個人をより一層孤立へと追いやり、他者や社会と没交渉（これもindependenceのもう一つの意味である）となっていく。

そして、これは子ども・若者の現代的貧困とも深く結びついていく。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 現代的貧困の特徴

現代的貧困が戦後直後の貧困と大きく異なるのは、より高度化した近代の現在にあって、家族、親戚縁者、学校、地域といった身近な共同体が脆弱となり、いざというときに頼れる身近な他者がおらず、友だち関係や遊び仲間さえも作れない、遊びを通した多様な体験も享受できないといった「関係の貧困」と「体験の貧困」が加算されている点である。

むしろここでは、個人の自由と自立の原理に伴う身近な共同体からの離脱と断絶が生み出す関係の貧困が、経済の貧困に先行して広汎に生じている点が戦後直後の貧困と大きく異なる。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 自立志向の社会が生み出す生きづらさ①

以上のように図表1～3と現代における「自立」の意味、現代的貧困の特徴をふまえると、実社会に出ること自立することが、円滑に社会を回すために“強いられた外発的な自立”でしかないことを、子ども時代から身に沁み込ませてきた結果として、実社会（有用性・生産性の世界）を目前にして若者たちの身がすくみ、ひきこもるのも当然といえる。

人間の生を個人の能力発達と自己責任・自己決定、自立原理で追い立てることは、子ども・若者の生きる意欲や自尊感情を奪う結果しか生まないことに早く気づく必要がある。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 自立志向の社会が生み出す生きづらさ②

事例１

私の母は、大学を卒業して専門職に就く矢先に結婚し、私を産んだ。当時、そのような専門職に従事する女性は少なく、男性社会の中で男性と互角に戦うべく一生懸命勉強したと思われる。しかし結婚し、妻となり母となったことで、そのような社会的アイデンティティを一度手放し、女性として生きることを求められた。しかしながら未だ２０代前半の母にとって、それは難しかったと思われる。そこで母は私や弟に、母が生まれてきたように（男性？）社会で生きることが出来るように、高い点数を勉強でとり、高学歴の学校に入ることを求めた。

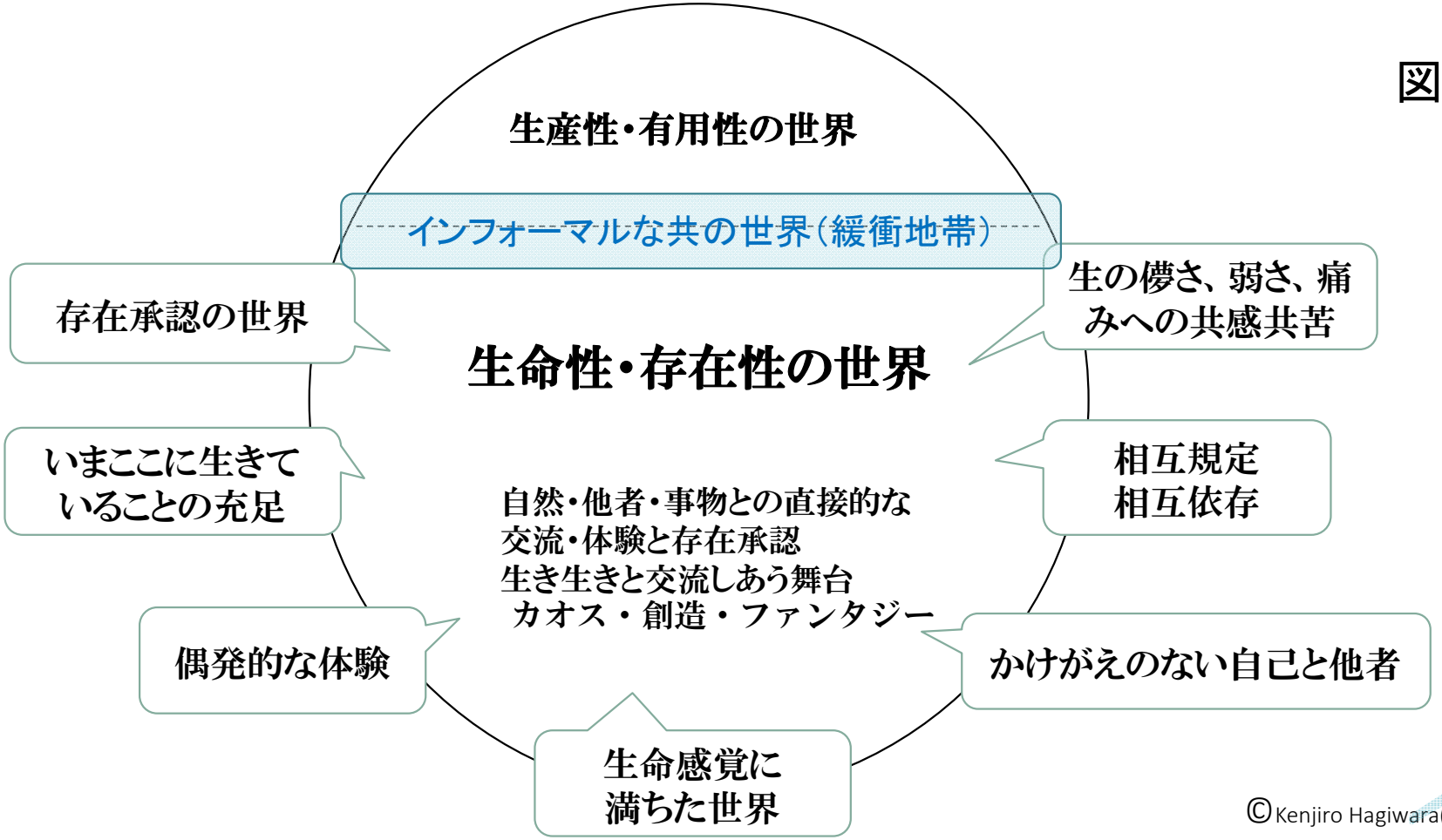
数値化された価値によってしか、アイデンティティを表現出来ない子ども（この場合は私）は本当の私とは何かということを見失い、とても空虚になった。

居場所とは数値の中にあるのではなく、やはり心と心のふれ合いの中にあるのだと今は思う。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 近代産業社会（生産性・有用性の世界）が見落としている世界

図表４




©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

遊び、趣味・余暇、伝統的な祭り・芸能、文学の世界など、生命の躍動と生の陰影にかかわる世界

# 生命性・存在性の世界の特徴

人間の生には「生命性・存在性の世界」といえるもう一つの側面がある。

それは図表４に示したような生命感覚に満ちた世界、いまここに生きていることの充足感や歓びを感得する世界である。それは自然や事物との直接的な体験や同世代や他世代との交流を通じて、互いの存在を感じ、認めあう存在承認によってもたらされる、かけがえのない私とあなた（意味ある他者）を感得する世界である。

またそれは失敗や挫折、病、老いや死といった人間の弱さや生の儚さへの共感共苦を含む世界でもある。体験は偶発性に富み、人間の意図や計画を超えた側面を持つ。

この世界は遊びや趣味・余暇、伝統的な祭り・芸能、芸術、文学といった生命の躍動や生の陰影に深く根差す世界である。いずれもフォーマルな教育や産業界においては「無駄」「脇役」「周縁」として置かれてしまっている。

# やせ細るインフォーマルな共の世界

事例２

　自転車で通りを走る時、歩道を走ると、歩行者から邪魔者扱いの視線が注がれる。かといって車道を走ると自動車から遠慮なくクラクションが鳴らされる。

　その時僕はいつもこの自転車の置かれた状況は、中学生の時期に似ているなと考えたりする。

　中学生には地域に遊び場という場はなかった。もちろんバイトもできないから金もないし、公園では小学生の保護者から冷たい視線。まるで違法駐輪の自転車のように、どこにも止める場所のない自転車のように、学校と家の間の社会に僕の居場所はなかった。それでも中学生には自転車しか乗る物がなかった。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 他者との交感交流不在の都市空間

## 事例３

　大学入学のため入学式を前に上京して、見知らぬ新宿という町に出た時、途方もない居場所のなさに襲われたことがある。誰も知っている人がいない、私を知る人がいない。私はここにはふさわしくない・・・そんな思いが強く込み上げ、泣きたくなった。しかし、泣くことを許される場所さえなかった。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

インフォーマルな共の世界の再生へ

# 生きる歓びを感じる時空間

「仕組まれた体験」が学校内外や放課後での活動のあらゆるシーンに行きわたることは、あたかも日陰のない真夏の太陽のもとで、子ども・若者が大人・社会の視線から逃げ場なく照らし出されていく状況に似ている。

子ども・若者の居場所には大人社会の有用性・生産性と規範性の世界から少しはずれて、羽を休める木陰のような場も欠いてはならない。

子ども・若者自身の自律的な探索や遊びのなかで、今ここに生きている生命としての自己が充足していける時空間をいかに保障するかが課題。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 聴いてくれる誰か①

## 追加事例1

中学一年生の頃、仲の良かった友人グループから突然省かれ、親や教師には心配をかけたくないからと相談せず、他に頼る友人も見つからず、誰にも相談出来なかった私がすがりついたのがモバゲーという当時流行していたSNSであった。

そこで知り合った人は年齢や学歴、職種も様々で、いじめられていることを公言出来ない私の話に静かに耳を傾け励ましの言葉を送ってくれた。二年生に上がる頃には自然とグループとの関係が解消され、打ち解けることが出来たことを伝えると、相談していたSNSの人々が一緒に喜んでくれたことを今でも鮮明に覚えている。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# 聴いてくれる誰か②

## 追加事例2

教室では教師に反抗ばかりしていた彼らは、保健室やカウンセリングルームには足しげく通っていた。ひょんなことから彼らと仲良くなれ、話を聞いたところ、「保健室の先生は最初から自分たちが悪いと決めつけずに、話を最後まで聞いてくれる」と言っていた。その言葉が、今も私の中に残っている。

いつもとげとげしく、周りの人や物にあたり散らしていた彼らが欲していたのは、「自分の話を聞いてくれる人」だったと知ったことは、私にとって衝撃であった。

# 若者が求める居場所

## 事例4

学校以外にも自分の身を置ける居場所があっていいと思います。現実から逃げているだけだという人もいるかもしれませんが、つらいんだったら一時的に逃げてもしょうがないと思います。逃げて新しい居場所を見つけて、それを励みにして、現実と闘える力を養うことも必要です。

だから、私が考える居場所は、開放的な空間とたくさんの人たちに出会えること、そして自分に責任をもち、目的をもって行動できる、そんな大人になるための準備が十分できる場所が、子どもたち、若者たちの居場所となりうると思います。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

# “溜めのある社会”へ

ホームレスや貧困の大人や若者たちを支援する湯浅誠と河添誠も、現実社会と闘うためには、闘わなくてもよい居場所が必要であると指摘している。

彼らは本当に強い社会というのは、「人間の弱さを認めて受け止められる社会、弱さの認識から相補扶助・社会連帯の必要性の認識を通じて、『市場』とは異なる『社会』を構想できる社会」であるという(注)。こうした社会を「溜めのある社会」と彼らは名づける。

(注)湯浅誠・河添誠『「生きづらさ」の臨界』旬報社、2008年、174頁

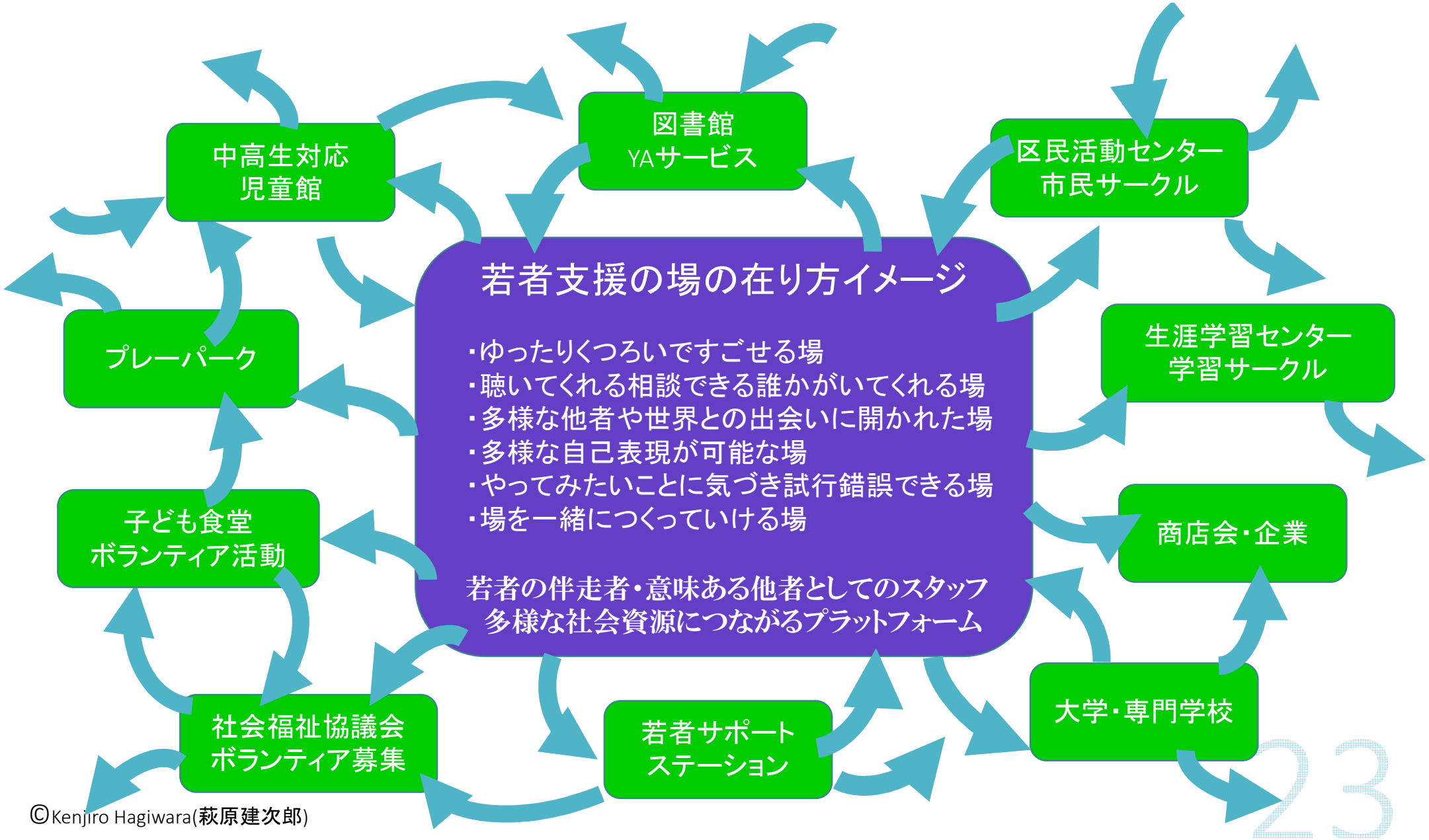
萩原『居場所－生の回復と充溢のトポス－』春風社,88頁

# 多様な居場所がつながる地域へ

これからの居場所のあり方としては、地域にある複数の居場所が、制度や活動の分野を超えてつながること、例えば同じ地域にある高齢者の居場所と子どもの居場所がつながるなど、言わば「居場所同士の連携」や「居場所ネットワークの構築」が期待される。（中略）

そのためにも、1つの居場所内で完結するのではなく、それぞれの居場所が他分野や多領域に開かれることが大切である。そのような多様性に開かれた活動の中で、支援の受け手が担い手になるということも実現する。

空閑浩人「社会福祉における『場』と『居場所』をめぐる論点と課題－『地域共生社会』の構築が求められる時代の中で－」（公）鉄道弘済会「社会福祉研究」第133号,2018年,24頁




©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)

追加シート

# 一つのまとめとして

これまで述べてきたように、個の自立の原理を強力に働かせた現代社会では、だれもが生きづらさを根底に抱えやすい。

それゆえ、「生きづらさ」「困難さ」というのは人生において最初から固定化されたものであったり、特定の子ども・若者だけが抱えたりするものではない。

子ども・若者からすれば多様な活動に参加することや居場所(できれば複数)があることで、日々の生きる意欲や心の糧を得て、困難な状況をいなしたり、それが深刻になる手前で回避したり、乗り越えていったりする。

とりわけ人生の揺れ幅の大きな若者の時期に、どのような状況にあっても「いつもと変わらぬ仲間(とりわけ学校外)や職員・スタッフさん、地域のおっちゃんおばちゃん(第三の大人)に会える場」は欠かせない。

©Kenjiro Hagiwara(萩原建次郎)